

DOLL FORUM JAPAN

DOLL FORUM JAPAN
ドール・フォーラム・ジャパン
FEBRUARY 1995 Vol.4



人形制作・撮影
吉田 良一
Ryouichi YOSHIDA

CONTENTS



グランパバ お人形フェアー

(青山本店)

3月3日まで開催中

グランパバ毎年恒例の、お人形フェアー。

国内からは、原仁子のビスク製市松人形、西崎富久子のレプリカ・ドール、他に小林美枝子、檀田静子、本誌で紹介の三輪輝子、岩切夫妻、長谷川裕子などが出品、海外では、おなじみのレンチ・ドール、ケテ・クルーゼやイタリアやカナダのビスク製アーティスト・ドール、他に、国内ではグランパバでしかみられないユニークな欧米の量産モデルの抱き人形が展示、販売されている。

店長の松田さんは、「ドール・アーティストを「夢を現実の姿にし、虚と実の世界を橋渡ししてくれる人達」と呼び、スタッフと共に、作品の背景から作者の思惑まで、見る人に丁寧に説明を重ねる。時節柄、雛祭りにむけてのイベントなのだが、従来の段飾の雛人形よりも、住宅事情や、時代の要求に合わせ、年間を通して飾り慈しむことができる質の高い人形を、という考えで行われている、個性的なお人形フェアーである。

グランパバ青山本店

東京都港区南青山1-1-1 新青山ビル2F
(地下鉄青山一丁目下車)

☎03-3475-1388 営業11時~19時

(写真: 上段左・原仁子 上段右・三輪輝子

下段左・小林美枝子 下段右・岩切克樹)

【表紙】 人形制作・撮影 吉田良一

【スケジュール】 p 2, 3

【ゲイルからの手紙 第2回】 ゲイル・エニド・ジマー
p 4, 5

「アーティスト・ドール・スター
オフ・オフ・ブロードウェイ」
(NY CFMギャラリー「ドール・アズ・アート」)

【カバーインタビュー 吉田良一】 p 6, 7, 8, 9

【人形つれづれ 第4回】 福島弘太郎 p 10, 11

【レビュー】 p 12, 13

(吉田良一、大槻和子、山本七生、
安岡郁夫、長谷川裕子、永野智、
三輪輝子、本田明子、掘佳子)

【アマチュア手作り人形展】 p 14

【ピン・スポット】人形ブティック竹取物語 p 14

【インフォメーション】 p 15

【追悼・池田雅代さんを偲んで】 p 15

【from overseas】 p 16

ロエリー・ブロークスマ・ミューラー
ゾフィア・マジャク

【近況報告】 くら田たまえ p 17

【教室案内】 p 18

【DFJ活動報告・お知らせ・編集後記】 p 19

(「人と形のあいだで」と「coming on the scene」は
お休み致しました)

ドール・フォーラム・ジャパン

1995年2月22日

ドール・フォーラム・ジャパン事務局発行

ドール・フォーラム・ジャパンは、日本の
アーティスト・ドールを支援するためにつく
られた情報誌「ドール・フォーラム・ジャパ
ン」の購読会員による非営利の組織で、購読
会費とユーラシア・ドールズのスポンサーシ
ップにより運営されています。

SCHEDULE

3月～5月のスケジュール

	住所・開館時間	2月／	3月／	4月／	5月
横浜人形の家 (企画展示室)	〒231 横浜市中区山下町18 ☎045-671-9361 10:00-17:00 月曜日	2/4-3/12 第9回 館蔵ひな人形展			4/15-5/21 第9回 館蔵五月人形展
横浜人形の家・貸し会場 (人形展示のみ掲載)	*準備・片付けの日程が含まれています			4/4-9 村井恵美子	4/18-23 紙谷元子
新宿せ・ら〜る (人形展示のみ掲載)	〒160 新宿区歌舞伎町1-30-1 新宿PEPE 6F ☎03-3205-2673 10:30-20:00 年中無休	2/22-2/28 モルあそび(ボラン)と人形たち (福島弘太郎・宇山あゆみ)	3/22-3/30 高橋猛彦 人形展		

昔人形青山 ギャラリーK1 (アビール・ボックス)	〒603 京都市北区室町通 北大路下ル小山東大野町69 ☎075-415-1477 PM 1-7	2月1日～4月30日 山本七生(千葉) 原明代(大阪)・小沢靖子(京都)	5月1日～7月31日 土井陽子(神奈川) 長谷川彩美(兵庫)・松田珠江(東京)
---------------------------------	--	--	---

第14回 エコール・ド シモン 人形展



3月2日(木)～3月7日(火)
10:00～18:30
(最終日のみ18:00まで)

新宿紀伊国屋画廊
☎03-3354-7401

毎年恒例の教室展です。
四谷シモンをはじめとする生徒、
OB達61名による70点以上の
人形が並びます。

【問合先】 エコール・ド・シモン
東京都渋谷区千駄ヶ谷 3-5-4
☎03-3402-9488

花と人形たち

第4回 今輝いている女性達展
3月9日(木)～3月14日(火)
大阪高島屋グランドホール(7F)
後援 文化出版局
「銀花」に掲載された7名の人形作家と花をプラ
スしたユニークな展覧会で、くら田たまえ、山口
景子(写真)らが出品。

鬼三昧 - くら田たまえ人形展

4月24日(月)～4月29日(土)
ギャラリー ま・たんと
〒530 大阪市北区梅田1-1-3
☎06-348-0203
(11:00-19:00、土曜17:00まで)
*1月に予定されていたが、阪神大震災のため、
急ぎょ上記日程に変更。

アトリエ・アイドル 創作人形展95'

3/7～3/13 田中八重洲画廊 ☎03-3271-7026
(東京駅八重洲北口)
11:00-18:30 (最終日16:00迄)
*島村龍治人形教室展。また、市松人形展も10月に
開催予定。
【問合先】アトリエ・アイドル ☎03-3200-1351
〒169 新宿区高田馬場1-10-18 諏訪町マンション 401

「モールあそび(ボラン)」と人形たち・・・

(上記せ・ら〜る欄参照)

小誌「人形つれづれ」連載の福島弘太郎の生活文
化人形(写真)と、宇山あゆみのモール人形



ゆりひ 情報! 創作人形四人展 '95 大学堂ギャラリー(心斎橋)
3/9-3/14 出品: 上住洋子・右近知子・福山まり・宮崎淑子 12:00-18:00 ☎06-241-1124



「サンジェリー」
アドナン・キャラベイ

ゲイルからの手紙 第2回

「狂った王」
ナンシー・ワイリー



オフ・オフ・ブロードウェイ

ゲイル・エニド・ジマー

「ドール・アズ・アート」(芸術としての人形)は、ニューヨーク・ソーホーにあるニール・ズカーマンのCFMギャラリーで、年に一度の定期企画として、一九九四年十一月十七日より十二月三十一日まで開催された。

悲しいことに、出品する予定であったアーティストの一人、ロバート・キーン・マッキンリーは九月二十八日に亡くなり、非売品である一作品が出品され、往時が偲ばれた。だが、その他の六人のアーティストは、エクサイティングな作品を多数展示した。

ズカーマンはファンタジーとユーモアという自分の志向をはっきりと意識して、アーティストを慎重に選択した。少数のアーティストに焦点を当てる事によって、アーティストたちは、主題に多様性を持たせることができ、異なる個性が一堂に並べられる事で、それぞれが芸術的な個性がより強く発揮された。

ポーセレンから合成粘土、布、までの素材、芸術史における様々な様式、そして人間や超人的なフォルムなどのそれぞれの異質性にかかわらず、「ドール・アズ・アート」には一体の人形が他の人形と補いあうような凝集力があつた。ニール・ズカーマンの方針が「ギャラリーにふさわしい」作品を選択する時に、自らのコンセプトに基づき、他の芸術作品や絵画を選択してきた時と同様にしたからこそ、このような事が可能になるだろう。つまり、彼は、ストーリーのある人形や、彼がサブテキストと呼ぶものを持っている人形に引き寄せられたのである。

イギリスの二入組 ボール・クレイとピーター・コウは、五体から十五体まで限定のエレガントな衣装をまとった有名な肖像のワックス・ドールで有名である。

CFMギャラリーのために彼らは、グスタフ・クリムトの絵画に発想を得た一体ものの新作を三体制作した。彼らは他に、映画「ブルーム・ストウカーのドラキュラ」の五場面のうち最終場面に登場する四人のキャラクター「ノスフェラツ」、毛皮のトリミングのガウンを着たマレーネ・デートリヒの一連の肖像人形の中の一体と、チャールズ・ディケンズの「ミス・ハビシャム」などの作品も展示した。ノスフェラツの作品群は高さが、約六六センチメートル、他の五体は七十七センチメートルである。

他のアーティストは皆、アメリカ人であるが、アドナン・キャラベイはトルコで生まれている。彼のフィギュアのいくつかは、本物の動物の頭蓋骨に、びつたりサイズのガラスの目をはめて作られている。

猿の関節人形は、十八世紀の装飾された衣装をまとい、適切なかつら、宝石類をつけており、ミニチュアのファンに喜ばれるだろう。キャラベイの猿の人形は、ルイ十五世の時代に「サンジェリー(猿真似)」とよばれ、フランス貴族社会の飽食ぶりを風刺する論評に登場する着飾った猿の、現代における従姉妹である。衣装をつけた動物というキャラベイの作風の例外として、約十七センチ大の

天使が、壁や屋根にとまっている。彼は、人を表現しようと思えば、同様に優れた仕事ができることを証明した。

「ドール・アズ・アート」の作家の中で、もっとも多く作品を出品したジョー・エレン・トリリングの布と粘土のスカルフチャール・ハビシャム、一見、キャラベイの動物の親戚のようだが、彼女のつくる豚、犬、その他の動物群は、ウィットにとんだタイトルの小さなドラマを演じる俳優たちである。たとえば「ウインザー家のデュークとタッチェス」という一組の犬は、布張りの椅子やソファに腰掛けさせられているが、これはトリリングのユーモアあふれるメッセージを伝えるために不可欠な小道具である。また、他のいくつかの人形は、動物の恋人とベアになった人間の形だ。ソファでくつろぐ絶世の美女バービーと、白鳥の姿をしたセウスの「オリンポス山のバービーとセウス」。「ケンタウルスの逆転」では、二つのフィギュアが相対的になり、一体がもう一方の反対となるように、人の半身と馬の半身を入れ替えている。参観者は、作品のジョークやメッセージを理解する方に気を取られ、つい、このアーティストの、素材を扱う卓越した才能を見落としてしまう。布を使いこなす事でこれほど熟練したドール・アーティストはめったにいないのだ。マドンナを含む多くの有名な、彼女の作品を所有している人は、当然のことだろう。

◆ もう一人の女性作家、ナンシー

・ワイリーは表面の独特な彩色方法と、素材の創造的な使用により、統一感のある五作品を出品。日本の紙粘土を使用した「狂った王」を除き、作品の素材はスカルビーだ。「フロアのサスキア」は、明らかにレンブラントが妻を描いた絵に発想を得たものだが、ワイリーは、作品の衣装を二枚以上の肖像画から混成させるため、豊かな発想力を用い、この優れた傑作に対し、単なる物真似を避ける事で、敬意を表したのである。

また、十六世紀の衣装の「フアー・ジンゲイル」(たが骨で広げたスカート)ではワイリーは、スカートを広げるために、鳥の入った鳥かごを使った。なおかつ、このスカートの女性は、王の王冠として使われているもっと小さな鳥かごに話しかけている。私は、鳥かごをこんなふうにしやクルする人間なんて、他に考えつかない!

また、「ドール・アズ・アート」の新人として、演劇の経歴を持ったリチャード・ブラウズがいる。今でも主な収入源である劇場の背景デザインの出身であり、三次元のフィギュアを制作するようになったのは、彼にとって自然なことであった。

今回の展覧会における「ロミオとジュリエット」のように、彼の初期の作品は、額縁のついた精形の作品で、その中のステージで演技をするフィギュアがあり、時には内部に照明が設置されることもある。しかし、「セイレーンの歌」と題された作品の人魚や、「右の三番目の扉」のマダムは完全に抽象化されており、一体で

立っているフィギュアと同じくらいドラマチックである。

◆ 「Where」というニューヨークのイベント情報ガイドが、「ドール・アズ・アート」を美術・アンティーク欄で論評した時に、ポーレット・ワイズ記者は、冒頭で「オー、美しい人形たちよ!」などという陳腐な表現をはばからなかっただけでなく、おきまりの、バービー人形との比較をやってしまった。たぶん、それは、多くの作品に胸をはだけたからだろう。少なくとも、ミズ・ワイズはこれらの人形を「成人指定」と呼び、「まともな親は子供を作品から遠ざけたくなるかもしれない」と語り、作品を、「ウィットがある」が「挑発的」と評価したのである。

この種のスカルフチャールが何年もの間、混合素材の芸術様式として発展してきたのを見続けてきた私たちは、批評として通り過ぎていくものに、苦笑することしかできない。だが、ニューヨークに来た人が、たとえば「Where」の記事を見て「ドール・アズ・アート」を見に行つたとしても、いけない事ではないでしょう?

*注釈

文中、人形作品を意味する言葉として、ドール、フィギュア、スカルフチャールという用語が使い分けられています。本誌では、原文でのジマーの使い分けを尊重し、ドールを人形と訳す以外は、原文のままとしました。

figure フィギュア 人物、肖像 (主に絵画・彫刻で使われる)
sculpture スカルプチャ 彫塑、彫像

今回の「ドール・アズ・アート」は今年の十二月七日から十二月三十一日までで、カタログづくりを計画している。CFMギャラリーはグリーン通りの112番地にある。

カバリーインタビュー

吉田 良一



昨年十二月に二年ぶりの個展を開催、主宰する人形教室「ドール・スペース・ピグマリオン」で多くのドール・アーティストを育ててきた吉田良一氏。人形に芸術的アプローチを続ける氏の思いを語っていただいた。

(インタビュ・文 小川千恵子)

——人形を作り始めた頃についてお聞かせ下さい。

「高校時代から絵を描いたりして、何か芸術的なことをやりたいて思っていました。大学には行ったんだけど、学生運動したり、勉強が嫌いだったりで中退して、写真学校に入ったんです。その先生が芸術的な志向を持った先生で、フランス文学や絵を勉強したほうがいいと言われ、まあ、その人との出会いが自分に深く目を向けるひとつのきっかけだったんでしょう。」

その頃、四谷シモンさんが出始めたり、ジュサブローさんがNHKで*新八大伝などをやっている頃で何となく人形の方に目が向いていったね」

——私もこの頃ですね、人形が気になり出したのは。

「うん。で、何となく作り始めて友達と発表をしたり、オープンした人形のショップに作品を持って行って意見を聞いたりしました。だんだんと人形の芽が出始めた頃ですね。人形を教える所がなかったんで、教えることを始めたりして、特に人形作家になりたいとい

う意志が強烈にあった訳ではないんだけど、人形の方へ導かれたというか、それで今に至っているわけですけどね」

——人形作りは独学で覚えたのですね。

「あの頃は教わる所がなく、ジュサブローさんの所に電話したけど出なかったりで、そんなことしているうちに教える方になっちゃったんですよ。教えながら勉強することもありました。また、当時は教えるというよりも、仲間を増やすということの意味が強かった。」

その頃の仲間で*ネズナイカというグループ展をやったりしました」

——その頃の仲間というと？

「浅見恵子さん、滝康子さん、菊地恵美子さんなど。友人の丈とよつくさんなどにも協力してもらったりしてました」

——その頃と今と比べるとどうですか？

「ある面では自分が心の中で描いた状況に近づいていますよね。人

形を表現手段として選ぶ人が増えているわけですから。僕が教えてきた人も今は教える立場になっているし、自分の教えた人から、自分を脅かす人が出てきてほしいと思っています」

——吉田さんのお弟子さんは個性的で、活躍されている人が多いですね。先生のコピーから抜け出せない事もよくあることですが。「コピーじゃなくて、習うとしたら、まず自分の好きな人とか技術的に納得できる人とか選ぶよね。だから、どこかしら影響を受けざるをえない、というのは事実だ」と思うし、技術を習得するということだから最初のうちはしょうがないと思う。

僕は習ってはいないけれど、人の作品を見て、目についたいい所は吸収し自分のものにしたいと思うけど、それはあくまで技術であって自分の世界はどうか、といったときに、やっぱり自分の世界を作らなくちゃならないんだからさ僕自身がそういう意識を持って教えるから、ある面ではつつ放すからね。僕は作る人の個性を尊重したいと思う。人形の世界って、結論とか完成ってあるもんじゃ

ないと思うんだ。それはずっと続

くことだから、そのときのその人

が作品になるわけだから、最終的

にはその人が自分の中で解放され

て自由に自分の中のものを出して

いくというのが一番理想だし、結

局それしかないと思うのね。人が

答出してくれるものじゃないから

教えるってことは途中の足かり

を作るとか技術的に不足している

部分をより早く習得できるように

補う、そういう仕事だと思っ

すけどね。でも、個性を尊重しな

がら教えるってのは、ものすごく

難しい。

今は、教室には若い人が多いで

すよ。いい指導者っているのはい

てくれるといいよね。でも最終的

には、勝手にせい、という世界だ

からね。自分の作風を作るまで、

十年はかかりますよ」

—— 人形を作ること、写真を

撮ることは、両極としてなくては

ならないものですか？

「自分の人形を撮るときと他人の

を撮るときでは違うからね。だか

ら可憐の人形を撮っている方が、

さめているかもしれないね。

人形ってのはゼロから生み出すけ

ど、写真ってのは何かないと生み出

せないでしょ、だからそこにある

ものをどういうふうにするか、そ

の人の美しい所をどう切り取っ

ていくか、どういう空間作りをす

るか・写真の撮り方によっても

の見え方が全然違いますからね」

—— 本当に写真で大事ですね。

写真の個展などはお考えですか？

「うん。やりたいよね」

—— 「人形のこと、あまりしゃべって

ないよね」

—— そうですね(笑)。吉田さ

んは、表現方法としての人形の形

態にはあまりこだわらない、とい

うことはありますか。トルソーで

も人形として捉えてしまう、みた

いな。

「彫刻の世界でも、木彫りに彩色

していた時代ってあるでしょ。最

近のものでもそういうのあるし。ま

ったく人間の形から抜いちゃっ

てそのままりアルに樹脂で作って

洋服着せちゃう、スーパリアリ

ズムなんてのもありますよね。そ

ういうものも人形と見るか、彫刻

と見るか、というのがあると思う

んだけど。人形を作っている人間

の目から見ると、人の形している

ものはおおよそ人形じゃないかとい

う気がするんだけどね。

ただ一時期人形というのが彫刻家

の目から見ると稚拙なものが多かつ

たから、『人形的』であるという

ことが、悪い評価だったよね。人

形という言葉がそういうふうに使

われているというか、婦女子のも

のであるというような言い方はず

いぶんあったんじゃないですか。

いわゆる、芸術の世界の中ではね

絵なんかでも、人間を描いてあ

るものに、人形みたいな描き方を

している、とかね。それは、技術

の稚拙さなのか、精神的なことを

言っているのか・・・僕は、自

分の中でファインアートと人形の

間に境界線を持っていない。たと

えば、*ハンス・ベルメールは、

あれはドール、と言いますか？」

—— たしかにアート、ですね。

人形だけれども。

「そうでしょう？僕は自分の作っ

ているのは、人形であって、人形

でいいと思う。へんにへりくだ

る必要はないと思う。*可淡とは

よく、隣に彫刻やベルメールのよ

うな作品がきても耐えられる作品

を出そう、と話していました」

—— しかし、人形作家自身は発

展しづらい現実がありますよね。

自己満足を感じるプロの作品にも、

よく出会います。

「人形を作る人はナルシスティッ

クになりやすい。作る時は熱くて

も、作り終った時は、自分の作品

を否定するくらいに突き放して見

なければならぬ。可淡などは、

非情なまでにそうしていましたね」

—— あえて、人形にこだわるわ

けは？

「人の形にすごく興味があるんだ

よね。肖像画にしても、人間を描

いてある絵は好きですね」

—— 何かひとつの引力のような

ものなのでしょうね。

「そうだね。だからそれに惹かれ

て人形を作っているんだと思う。

写真撮っても、人間ばかり撮って

いたし、十代で写真を始めて風景

写真を撮っていた時も、その中の

人間を撮っていたんだ。どうして

だか、分らないけど、やっぱり

人間に興味があるんだよね。自分

という人間に興味があるわけだけ

ど」

—— 関節人形が多い訳は・・・

「関節人形が多いといっても、最

初の頃は、布張りのものもずいぶ

んやっているんですよ。でもそれ

に限界を感じたこともあって、ま

た最初に戻って関節とかオブジェ

とかが、この十年くらいの仕事に

なってます」

—— その頃の作品は？

「抱き人形はひとつここにあるけ

ど、他は皆、手から離してしま

いました。人形というのが人の形を

していて、ある程度デッサンをき

ちんとすると、生き人形に行き着

いちやう・・・そこまで作る技術と

か、生き人形が持っている魅力も

すごくあるけど、そうじゃないも

のもあるしね・・・自分の心の中

のものをより象徴的にしていく、

余分なものを捨てていくというか

余分なものを捨てていくというか

余分なものを捨てていくというか

余分なものを捨てていくというか

余分なものを捨てていくというか

余分なものを捨てていくというか

余分なものを捨てていくというか

それは造形としてそうしていく部分と、自分の精神世界を極めていく部分での省略ってあっていいと思う。それがどういう形になるか多様であっていいと思うんです。

とかく技術的なことだけに目がいさがちじゃない、人形って。すごく細かく良くできているとか。それに魅せられるものってあるけれど、その必然性がないとね。その作家の中にあるものが必然的にその形をとってその作家の世界ができていく。極めていくと、その作

っている人の人間性とか哲学がにじみ出てきている部分に惹かれるじゃない。抽象であろうと、具象であろうと、スパーリアリズムであろうと、何であろうとね。だから、あいまいさというか、迷いのあるもの……僕もそんなものを作ってますけどね……そういうものは今一つ説得力を持たないかもしれない。そこで自分のものはつきり出していくのは難しい事だけでもね」

——私は企画展を二回やってみて、人形って、見る人の好き嫌いで評価されてしまう部分が大きいんだな、と感じました。

「それはさ、見る人が生涯の恋人

に出会うみたいな部分で強いじゃない、だから『人形愛』といわれる言葉が成立するっていうか……単純に顔の好き嫌いがあって、これは好きな人形だ、とかさ。それはどちらかというと、造形とか線とかフォルムの部分のことなんだよね。

ただ、好き嫌いも、大事なことで、なぜなら、好き嫌いの中に見る側の感覚が集約されるわけなんだけど、でもコミュニケーションというところで考えた場合、その作られたものは何かを発しているわけだね。それをいやおうなしに嫌いだとかいって、ぱっとそこで断ち切っちゃうというのも良くないと思うんだよね。作っている人が強引に押しつけているわけじゃないんだからさ、一応人に見せてその中でその作品はどういうことを語っているか……

逆に見る側にそういうアンテナがないと見えない部分もあるわけじゃない？僕なんかいろいろなものを見ましたよ、人形に限らず。陶芸や古い木工品なども見て歩いたことがありますよ。だから、一時期耽美的なものを作っていて、その時期、粗野な素朴なものが好きだった

たので人にそういうと、驚かれたりしたしね。絵でも、細密画もあれば、抽象画もあるじゃない、多様なわけだから、自分の中でバリケード張って見ていると見ていることにならないから。そういうのをなくしてすっ裸の状態で接した方が、見る見方としてはね……」

——正しい見方ですよ。

「うん。クエスチョンも残るだろうけどね、意外とそのクエスチョンの部分に作っている人のものがあつたりするから」

——人形って昔は固定観念として求められているものって、ありましたでしょ、可愛くて、人の邪魔にならずに慈しみ愛されるような……現代の創作ものというものは、そういうものを突き崩していく冒険的なものが……

「それは今に限らないと思うんだよ、戦後日展系の方とかが、人形の形を崩してモダンなものなどやられているんですよ。ただ、それがあまりにも抽象化されちゃって訳分からなくなっちゃってつまら

なくなつたなんてのもあるのかも。しれないけどさ……ある面で、人形というのは、人の形をしているて分かりやすいから魅力があるというのとは事実だと思う。ましてそこに立体として存在していて生命感があつて生きているようなそこに命を感じる部分……僕も始めた頃はそういう所にすごく惹かれたし。いやおうなしに人形の魅力だと思ふよね。あまりそれが解体されて、抽象化されて何だか分からなくなっちゃうと魅力なくなっちゃうかもしれない。

結局人形として僕がこだわりを持ってやっているのはそのへんのことで、単に芸術的な表現としての欲求だけであつたならそうじゃないかもしれないね、芸術のための芸術になつていったかもしれない。論理的な展開になつて、形もどんどん崩れていって、そういうなかで、満足しているかもしれない」

——吉田さんのこだわるところが人形の何とも言えないところなんだな、って私も思います。

「人形は、すごく素朴な所から始まって、最初は呪術的なこと、望みであつたり……獲物が欲しいか



ら獣の絵を描いたり子供の健康を願って人の形を作ったりさ・・・表現ってそうじゃない？子供が泣くのも表現だしさ、みんな表現はしているわけで、それが人形であってもなんら不思議ではない」

——もし人形をやっていないかったとしたら？

「何か他の表現をやっているとと思うな。自分の中にあるイメージを形にしなければ気のすまない人間なんだと思う」

——将来的にやってみようと思うことは？

「いろんなものがあるからさ……そういうものが整理されて自然に必要なものだけが残って純化されていくのかな・・・自分の中にないものは作れないからね」

——この間お会いした時に、人形の可能性は無限だ、とお聞きしていますか？

「ああ。それは自分が無限だと思えば無限なんだから。いろんな人形がもつとあっていいと思う」

——すると、他の方にむけての

メッセージなどありますか？

「それ、自分がやらなきゃならないんだと思う。自分が作家なんだから、自分でやって見せていかなくちゃならないんだと思う。ただ自分に倣って作っちゃういけないと思うし、作りたくもないし」

——新しい素材を使うようなお考えは？

「それはありますよ、いろいろ」

——たとえば？

「ガラスとか金属の今までとは違う使い方とか、木もやりたいし・・・」

——では、それぞれの素材がまた奥が深いから……

「所詮人間のすることだからね。感動というのは、自然の中にあると思うの。神の作ったものというか。それを人間というのは写し取ったり、真似たり……人間だって自然から生まれたものじゃない、その人間をまた人間が真似て作るというの、その自然である人間を見て感動していれば良いんだけど、それをまた人形に置き換えて喜んでいくという……すべて芸術とはそんなものかもしれない」

——確かに、自然に存在するもの

のが一番だから、わざわざそれを越えることはない、という気にもなりませんね。

「だから、そういうものが自分というフィルターに映って出て来たものを形にする、ということが大事なんだから、それを置き去りにするのは空しいかな、という感じがするね」

——スーパリアリズムのようない方は？

「それはもう、作る側のコンセプトによって価値って本当が変わってくるじゃない。このコンセプトで作られているから価値があるけれどもそうじゃないところで作られているからつまらないとかさ、そのへんは、複雑だよ」

——今、他に凝っていることとありますか？

「フライフィッシングにのめり込んでいます」

——あの、遠くまで餌を飛ばす

「そう、釣りにいって、環境の問題なんかも良く考えるようになってんだけど、自然に親しんで、作るものに影響が出たと思う。人間

の力ではどうしようもないものを感ずるし、人間も宇宙の一部であると感じたり・・・『星体遊戯』

はそんなことを考えている時にできたんです。でもそういうものまで感じさせようとか、表現しようなんて、そもそも思ひ上がりかもしれないし・・・。表現なんて、そんな大げさなものじゃないかもしれない、単なる遊びなのかもしれない・・・」

——でも、それも真実、あれも真実なんじゃないでしょうか？

「考えていくと矛盾だらけだよ。自分の中で矛盾がすぐあるよねだからおもしろいんだよね。本当にそうやっていくと、ひとつの真理を求めていく宗教みたいな感じに……」

——最終的に宗教にいつてしまうのでしょうか？(笑)

「それで何かを信じてることができないから、迷ってばかりいるんだらうね」

——芸術家というのは、自分が神であるという部分はあると思いますが。

「神の真似をする猿ですよ」
(一月十三日)

ビグマリオンにて)

* 注釈

「新八大伝」

一九七三年から七五年まで、NHKテレビで放送された人気人形劇。この番組のために辻村ジュサブロー氏が制作した三百体の人形が話題を集め、氏の出世作となった。

「ネズナイカ」

一九八〇年から八十四年まで、活動した吉田氏の門下生の有志のグループ。

「ハンス・ベルメール」一九〇二—一九七五

ドイツの画家、造形作家。一九三三年から関節のはずれた少女の人形を作り出す。シュルレアリスム運動に参加。巧みな描写によってエロティックな解剖学的イメージを展開した素描や版画が多い。(新潮世界美術事典より)

「天野可淡」一九五三—一九九〇・一一・一人形作家。交通事故で永眠。

【吉田良一 略歴】

一九五二年生まれ

法政大学中退後、写真学校入学。

この頃、人形に興味を持ち、制作を始める。

仏蘭西館、竹取物語で講師を務めた後、

一九八三年ドールスペース・ビグマリオンを主宰。

現在に至る。

自作写真集「星体遊戯」「ANATOMIC DOLL-解体人形」

写真作品集(天野可淡作品集)「KATAN DOLL-fantasm-」「KATAN DOLL」

「KATAN DOLL - RESTROSPECTIVE」

(いずれもトレヴィル出版)



撮影 デビッド・シーモア ©マグナム・フォト

連載コラム

人形つれづれ

(第4回)



福島弘太郎

一月十七日未明に起きた阪神大震災の被害は今日(二十一日)になっても依然拡大しており、新聞やテレビでは連日その惨状を伝え続けています。まったく信じられないような事態に对岸の火事ではないという恐ろしさとともに、被災された方たちの心痛はいかばかりかと案じられます。

ところでテレビでこの戦場のような光景を見ていてふと思いついた写真があります。それは報道写真家デビッド・シーモア(一九一〇―一九五六)の「小さないのち LITTLE ONES」と題した写真集に載っていた第二次大戦直後ナポリで写した子供たちの写真です。

おそらく戦災で親とも離れ行くあてもなく施設にいらるのでしょう、手足がなく首さえ無惨に欠けた人形をわが子のように大事そうに抱えている子どもの一瞬の表情を捉えています。何より目を引くのはその子の視線で、あきらかにその目は今ある現実の世界には向いていません。頬に触れた人形を通して、その子は今、懐かしい我が家を見、家族と共に平和で幸せな時を過ごしているかのようです。人形の体裁こそしていませんが、それは着の身着のまま放り

出されたその子にとって、ほかの何物にも代えがたい慰めであり、肉親や過去の思い出とつながる唯一の「窓」でもあるのです。逃避的な行為かもしれませんが、このような現実と空想を切り替えるスイッチとなる「窓」を持っていた事が、彼女が生きるいかに大きな支えになっていたか察せられます。

同じ写真集でここには掲載されていませんが、やはり人形を抱く孤児の写真があり、こちらの少女はもっと現実的な強い目をしており、人形の持つ別の一面を見せてくれました。

「人形は鏡である」とはよく耳にする言葉です。これは作るにせよ鑑賞するにせよ、その人のその時々的心情や状態が率直に映し出されるという意味だと思いますが、その写真に触れたときにはまた少し違った意味でこの人形を鏡だと思いました。その子と人形は髪の色も着ている服も特に似通っていませんが、何故か同じような存在に感じられたのです。まるで母親のような顔をして人形を抱くこの子もまた運命に抗し得ない無力な存在であり、人形を保護しつつも一方で人形に縋っているようにも見えます。互いに護り護られるというこの相互依存の関係は、まさしく合わせ鏡のように

その子と人形の存在を分かち難くしています。

このように寄る辺の無い人間にとって人形は、時には自己を投影することにより自己を護る鏡となり、時には現実を離れて空想の世界に入るための窓ともなります。このようにいつもそばにいる伴侶ともなる人形ですが、それを可能ならしめているのは他ならぬ私達だという点には注意が必要でしょう。いかに秀でた作品であろうと、人間との関係なくしては、人形は「物」としてのヒトガタの域を越えません。私達のイマジネーションの介在があつてこそ、ヒトガタは初めて生命を吹き込まれ人形となるのです。

前号でも述べたように、災害によって人間と同じく人形たちもまた過酷な運命を辿らなくてはなりません。今回の震災でも無力な人間の小ささをあらためて思い知らされました。多くの人形たちと一緒に人々の心のゆとりや豊かさとも崩れ落ちた瓦礫の下に埋もれていってしまうようでなんともやるせない思いがします。

被災地が一日も早く復興し、また以前のように人形たちが人間のそばで暮らせる日がやってくるように願って止みません。

【福島弘太郎・人形作家】



長谷川裕子



大槻和子



本田明子



山本七生

本田明子「人形展」

パール・グレイの夜が明ける…

九四年十一月三日〜十日

せ・ら・る (新宿)

今回が六度目の個展。全体的に、あるかないかほどに色を施した繊細な色感で、四十センチ大の、レースなどをあしらった布張りのボーズ人形が展示の中心である。

吉田良一氏の写真集を見て、子供が手を離れるのを待って、氏の門下に入った。以来十四年、現在では独立して自分のペースを守りながら、制作を続ける。しばらく前までは、日本的な人形を作っていたが、このころはイメージの世界にこだわっている。今回のテーマである「パール・グレイ」は、徹夜明けしたときの、音のない世界を想定している。作品からも感じられた、一種の硬質な感触は、ご本人から聞いた、作品を買った人が彼女の作品を評して、周りのムードに同調しない「やんちゃな」人形だといった話にも関係しているかもしれない。

緑の刻

山本七生人形展

九四年十一月十三日〜二十日

せ・ら・る (新宿)

タイトルには、自分の幼少時を表現したかったという作者の思いが込められている。展示された球体関節の数体の抱き人形は、どれも垢抜けないつかい日本の子供の表情を、胡粉の梨地仕上げでリアルに再現している。要くんという坊主頭の赤ん坊の男の子の人形の、頬のあかざれ具合に、思わずしんとした空気の冷たさが蘇る。

吉田良一氏に師事して七年になる山本七生さんは、今回の二度目の個展で、自分の作風さがしを試みた。一回目は、何でも作ってみたいと統一性がなかったという。いまだに時々迷ってしまうというが、今回の個展ではかなり方向性がはっきりしたのではないかと見受けられる。

ほど、強い個性を感じる内容だった。次回はやとりを持って、納得のいくものを出したい、とのことで、この作風の展開がどうなるか、楽しみである。

ほはらふんふ ひとあし早い

クリスマスー 大槻和子人形展

九四年十一月十四日〜十一月二十日

ギャラリー近江 (銀座)

一年半に一度は必ず、作品展をすることに決めている、という大槻さんの三度目の個展。人形作りは、八年前より二年間、吉田良一氏に師事した。

展示された十六体の人形は、四十センチ台から大きいものではメートルを越え、すべて新作。顔を作るのが好きということで、まず、顔ばかりを作ってしまう、それから全体のイメージを作っていくそうだ。大槻さんの人形は、すべて関節人形である。愛らしい子供や、成熟した女性などが今回の中心。見てくれた人が、ほっとするものができれば、と考えている。作風はまったく違うが、天野可淡の作品のファンだったことから、彼女の突然の事故死には強くショックを受けた。往年の彼女の制作に対するパワーを考えた時の無念さ、喪失感から、自分は、ずっと人形を作り続け、作品を発表し続けなければ、と考えたそう。大槻さんの優しい表情の人形に、強い意志を感じた。

長谷川裕子 人形展

九四年十一月二十日〜二十六日

ギャラリーオガタ (銀座)

油絵の勉強をしていた十三年前に四ツ谷シモンの人形に魅せられたのをきっかけに、人形の世界に足を踏み入れた。ここ数年、年に二十体のペースで制作しており、今回四回目の個展を開催した。素材は桐壺、石壺、胡粉を用い、人形は、すべて球体関節で服を着替えさせられる。

「子供のあどけない表情を大切に、それを生かす質感を追求したい」と、長谷川さんは語る。

グランババ青山本店のお人形フェアーに、三月三日まで十体ほどの人形が並び、

長谷川さんの人形の服には、本人の柄が感じられるようなユニークで、かつ暖かいものを感じるが、ご本人は、元から洋服作りをしていた訳でなく、自分の人形のイメージを作り出すために技術を身につける必要を感じ、人形制作を始めてから編み物や洋裁を習ったそうだ。今は、ある人からの依頼で、山本福松の市松人形の服や帽子を作っているそうである。

安岡 郁太展

天寿国 (てんじゅこく)

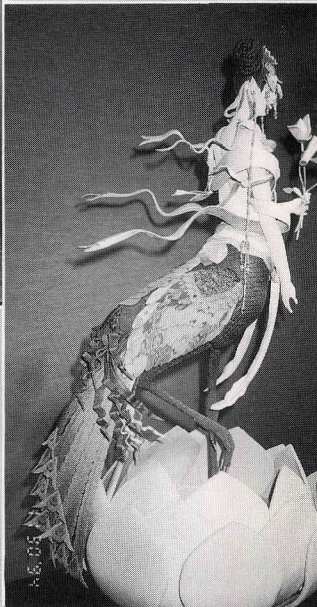
九四年十一月三日〜三十日

せ・ら・る (新宿)

意表をつかれたのが、中央奥の祭壇に彩られた吉祥天女像だった。ギャラリーにおける展示で米、粟などの五穀や散華を實際に供える凝りようにも驚いたが、メートルはある天女の背後にチマチョゴリをアレンジしたという、濃いピンクのスクリーンが象徴する作品全体のトーンの鮮やかな色彩感にも、目を奪われる。そしてその仕事の細かさ、丁寧さ。DMにも使われた上半身女性、下半身は孔雀という想像上の生き物「迦陵頻伽」には、その羽のために、古民衆の復元を専門にする店で買ったふくさをほどこし、千枚ほどの小片にしてから一枚ずつぎざぎざあわせていったという。他にも、使われている生地や素材には、それぞれ作者の思い入れがあり、凝った手間がかけられている。

古事記や万葉集、日本神話などに深く興味を持ち、その世界を立体化したいがために、人形という表現方法を選んだという作者の安岡郁太さんは、独学で人形作りを修得した。人形は、木の本体に細かな部分は石壺などで肉付けされ、布が張られている。だが、安岡さんにとっては、制作している本当に楽しいのは、付属品の類だという。正倉院の工芸品や染色が大好きで、それらのものをトータルで再現するには、人形が都合が良かったということなのだそうだ。

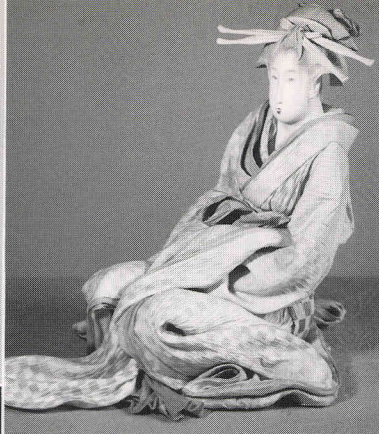
今回は、史実を忠実に再現するのではなく、仏教文化をテーマに想像の世界で遊んでみたそうだ。来年は制作十年目に当たり、何かまたおもしろいことができれば、と安岡さんは考えている。



安岡郁夫



三輪輝子



【人形展の感想文募集】
原稿用紙1枚程度。採用された方には、リーセ・カードセットを進呈。編集の都合上、原稿を修正することもあります。詳細は最終頁参照



生きとし生けるもの

掘佳子展
九四年十二月一日〜十日
せ・らるる（新宿）

岡山を中心に活躍し、世界への飛躍を試みる掘佳子さんの、東京での初個展。吉田良一氏の「星体遊戯」に触発されて人形作りを始めたというだけあって、球体関節の作品には、掘さんの氏作品に迫らんとする熱き思いを感じる。展示をする度に「生きてみたい」といわれることが多く、今回のタイトルとなった。今回展示された一メートル大の生き人形は、ロックバンド「黒夢」のプロモートにも起用された。作品は、関節人形では三センチメートルほどの小さな人形からほぼ等身大の意欲作まであり、座敷童子をテーマにした幼げな表情の一連の作品もあった。全体的には、いわゆる「こわい」印象が前面に出ているが、このような、奥の方から感じる素直で甘美で「女の子」な感じが、彼女の持ち味ではないかと感じた。

吉田氏に師事した他、ある彫刻家にも頼み込んで直接指導を受けたほどの熱心な勉強家である。個展の最中にも、新作のイメージが決まり、早く家に帰って人形を作りたい、と語っていた。

土と炎から生まれ

三輪輝子創作ビスクドール展
九四年十二月七日〜十三日
松屋銀座アートギャラリー

会場の入口に、男女一体の日本人形。そのうちの一体は、DFJ三号で紹介した「天草四郎」。会場内では、赤ちゃんとあと思春期の少年、少女まで大小さまざまな西洋風のビスクドールたちが顔を並べている。

それぞれの表情には、素材特有の冷たさが感じられず、まるで人間の体温を帯びているかのように、目は輝いている。世界中の作家がフランス生まれのビスクドールに憧れ、材料となる粘土もよく分からずに制作を始めたのが、約二十年前。十六年前に、同じように手探りの状態から出発した三輪さんは、創作ビスクドールでは、国内では草分け的存在であり、日本の女性が西洋に対して抱く夢や

憧れを人形という形にすることでは、最高の表現者と思われたい。今回の個展でもバリで手に入れたというアンティーク・レースをふんだんに使用した一メートル大の少し大人びた少女の人形が、人気を集めていた。

コスチュームから靴に至るまで、すべて自らデザインする三輪さんは、個展では毎回すべて新作をそろえる。

今回は、三輪さん特有の愛らしさ、美しさを追求する従来の西洋的な作風に加え、ビスクという素材で、日本をテーマに新しい作風に挑みたいと、日本人形も何体か展示された。今後の活動については、「一年間の制作数を減らしてでも、自分を深く表現する作品に挑みたい」と語る。「天草四郎」はその意思表明なのだろう、今後の彼女の意気込みを感じるものだった。

永野 智 人形展

九四年十二月十二日〜十八日
ギャラリー近江（銀座）

展示会場には、日焼けしたような落ち着いたトーン、の三十センチ前後の和紙人形が二十体ほど整然と並んでいる。一体ずつ見ると、どれもが歌麿や春信の美人画から浮き出たように、趣のあるそれぞれに異なるポーズをとっている。このような人形は、始めてである。

淡い色彩感にこだわること、素材は越前和紙の鳥の子のみを使用、本来は人形は日焼けによる色落ちを嫌うものなのに、永野さんは、かえって、作品が日焼けしてから飾ってほしいという。そのユニークで上品な色彩感ともかく、「浮世絵を立体化する」というテーマに挑み続けた成果か、線のふくらみや曲線には、素材の質感を操り、作者がそれを楽しみながら表現しているのでは、と思えるような伸びやかさがあり、江戸時代のユーモアやおらかな時代そのものも再現されているようだ。

人形の顔、手足に白磁を使っていることが、表現をさらに豊かにしている。和紙人形の世界では、姉妹人形のようにすべてが和紙で目鼻のない人形を想像しが

ちだが、永野さんは、思いきって、異なる質感の素材をミックスさせ、成功させた。粘土人形に和紙を着せたのとは違い、彼女の人は、和紙からアプローチした、和紙が主役の人形なのだ。永野さんは、和紙人形の可能性を、広げる一人といっても、過言ではないだろう。

吉田 良一 展

九四年十二月二十日〜二十九日
せ・らるる（新宿）

ビッグマリオンを主宰し、門下から現在活躍中の作家を多数輩出している吉田氏の二年ぶりの個展。

中央に、V字の深紅の展示台。その上に、淡いトーンの三十センチ大のトルソーが六体並べられ、今回の展示の中心となっている。今回はより普遍的なものを意識したという。氏の作品となると、つい非日常とか少女美というイメージを連想しがちだが、どこにでもいそうな少年の瞬時の表情がそこにはあり、意外な一面を見たような気がするが、それが氏の本質なのかもしれない、と考えてしまった。

作品の中でベシッ的な部分であるという和服をかけた裸体の大きな関節人形も三体展示。このスタイルの作品は、大変多く見かけるが、やはり先駆けである氏の作品は、完成されたひとつの領域としての落ち着きを感じる。

他にも、従来のテーマの継続とみられるポテンテジ風の衣装の作品群など。基本的な素材は、木質粘土に胡粉、油彩、アクリル絵の具。人形にどういう世界を与えるかによって人形の質は自然に変わってくるが、ひとつのものに構築されるのに三四年はかかるし、自分の世界としてまとまるには十年以上かかるという氏は語る。

人形の世界は、表現の可能性が無限にあり、今回のトルソーは自分の中の引き出しのひとつを開けてみた、ということ、アートとして理解される人形の世界への氏の模索は、これからドール・アートを目指す者にとって、大きな指標となっていくのだろう。

JR目白駅を出て、山手線沿いの細い道を池袋方面に歩いていくと、こじんまりとしゃれたギャラリイやブティックが続く。その並びにある竹取物語のガラス戸を引くと、手のひらに乗るほどの小さな人形や小物の世界が広がり、見る者の頬をゆるませる。

店内は、伝統の五節句を中心に季節感をベースとした展示と、かぐや姫の会の作品展で一年間が構成されている。今は「離遊び」。

出品作家は、久保田のり子さん、村田恵子さん、横山節子さんなど。野崎芳寿氏は、店の屋号にちなみ、かぐや姫を十五センチと十九センチ大の小さな市松人形で制作。店の上部には、橋本清氏、浅見恵子さんの人形などが飾られ、二十年以上前からアーティスト・ドールに着目し、その歴史を見つめてきた竹取物語の奥の深さが伺える。

オーナーの宮崎夫妻は、橋本氏の抱き人形との出会いがきっかけとなり、世田谷区奥沢に竹取物語をオープンした。開店当初より、抱き人形にはこだわり続けたが、橋本氏の仕事の芸術性や完成度を見た後では、彼らを満足させる作家が見つからない。新人発掘も試みたが、思うような結果が得られず、どうしても玩具の範疇にくくられてしまうこのジャンルの難しさに、方向修正を余儀なくされ

た。

以後、目白に移転、ボーズ人形なども扱うようになり、アーティスト・ドールを扱う店の先駆けとして、竹取物語は、吉田良一氏、浅見恵子さん、小林三千子さん、竹村和子さん、山吉由利子さんなど現在活躍する多くの作家の拠点となり、企画展や個展を行い、芸術性の高い人形を扱うための試行錯誤を時代とともに続けてきた。一方、人形教室も宮崎優人の考えで開設したが、元はといえば、お店をやりたくて人形にかかわった夫妻の歴史が、この竹取物語である。

時代にしなやかに対応し、現在は、小さくしてしゃれたものを志向した展示内容となっている。

(取材・文 小川 千恵子)

人形ブティック 竹取物語

東京都豊島区目白3-17-27

03-3954-3395

(午前十二時半〜午後五時半

日・月・祭日定休)



人形ブティック 竹取物語

14

アマチュア手作り人形展

94年10月22日〜11月20日
横浜人形の家

審査なし、出品料なしという、アマチュアのドールメイカーにとっては、自由な発表の場である横浜人形の家の手作り人形展は、昨年で七回目を迎えた。毎年決まって出品をする人、今年始めての人、サークル単位で参加する人などの、それぞれの思いを込めた191点の作品が一堂に会した。参加者の多くは、地元横浜を中心とする人達だ。やはり、幼児と、三十代からの主婦が中心になっているが、素材、作風、テーマの幅が広く、見ていて楽しい。通っている教室の習作を出す人、好きな人形を自分なりにコピーする人、まったく自由な発想で作る人などさまざま。中でも、六十代以上の方の作品に、独創的で伸びやかな発想の作品が多く、人形作りの楽しみの原点を見た思いがする。最年長の方が八十才というが、感性に衰えを感じない。かえって、若い方の作品の方に、何かにとらわれているようなぎこちなさを感じた。

(取材・文 小川千恵子)



追悼 池田雅世さんを偲んで

去る十一月十八日、DFJ会員である人形作家池田雅世さんが、ご病氣のため逝去されました。享年五十五才。葬儀は二十日に、東京・武蔵野市の安養寺で行われ、DFJを代表し私も参列致しました。

池田さんは名古屋に生まれ結婚後、三十四才のときに人形作りを始めました。一九八二年から八五年まで、吉田良一氏に師事、八五年には武蔵野市吉祥寺に人形とパンフラーの教室「アトリエ・ブチ」を開校しました。

自分史やクラウンといった独自のテーマに取り組み、特に五十才の記念に、四年がかりで制作した二十三体の人形による「人形でつづる自分史・マイメモリー」は、新宿のせ・らぶるの個展でも大好評を博し、新聞やテレビでも取り上げられ、池田さんにとって代表作となりました。

私自身、池田さんとは、九三年に東京・多摩地区の作家に呼びかけて行った企画展示「ドル・フォーラム・TAMA」に参加頂いてからのおつき合いです。その時、参加作家に「なぜ人形を作るのですか」と、問



いかけたアンケートに対し、池田さんは、次のようにお答えになっています。

「道化人形を創るー」

道化師の仲間として明るく賑やかで皆から愛されるピエロを引き立てるクラウン。顔は無表情に近く、心の内は淋しく、悲しく、嫉ましくと、こんな道化師(クラウン)を創りたいと思っています。内に秘めたクラウンの感情が少しでも表わせるようにできたらと、私の永遠のテーマとなります。

掲載の写真は、この時に展示された作品です。

出演されたテレビ番組でも、「人形は生活の一部であり、生きがいです」とはつきりおっしゃっていた池田さん。昨年夏、所用でお会いしたときに、病氣のことを初めて聞かされ、どこにもそのような気配は感じられず、ただ驚くばかりでした。将来の制作にも、なお意欲的であつただけに、池田さんの訃報は、残念でなりません。心より池田雅世さんのご冥福をお祈り致します。

DFJ事務局長

小川 千恵子



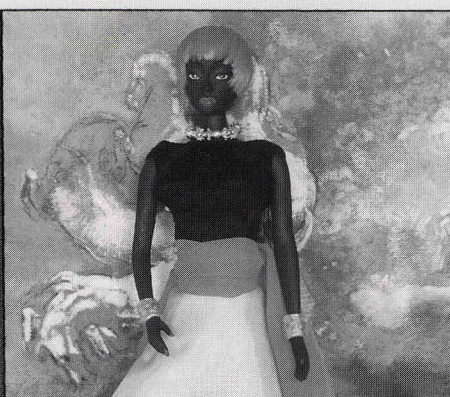
INFORMATION



ドルスバラードの
ショールーム オープン

昨年12月、ドルスバラードのショールームがオープンした。トムリンソン夫妻のレブリカ・ドールをはじめ、ドルスバラードのオリジナル作品など、数多くの人形が常時展示されている。

【問合せ先】ドルスバラード
〒124 葛飾区西新小岩
5-2-11
☎03-3691-3572
JR新小岩駅より
バス52番「上平井町」下車



ビリーボーイのブラックドール
「ディー」登場

DFJ3号で紹介した渡辺純子さんのプロデュースするアーティスト、ビリーボーイが、新作「ディー」を発表した。「ディー」は、ビリーボーイの人形のベイシック・モデルであるミドヴァニの黒人の女友達という設定。前作は、世界でもっとも美しいブラックドールとして絶賛され、すぐに売り切れとなったために、幻の黒人人形と呼ばれた。今回は、ポーセレンを素材として再登場。ディテールも、いつものように凝った内容となっている。

【問合せ先】エス・ダブリュー・ジャパン
〒154 世田谷区三宿1-28-4
TEL 03-5481-2025 FAX 03-3419-8606



ドイツ発
ウルスラ・ドリスケル(上)から

ドイツのドール・ジャーナリスト、ウルスラ・ドリスケルさんが、DFJのために情報を寄せてくれました。

ドイツの人形文化に貢献し、新風を起こしながら5年前に夭折した故マシアス・バンケの興した会社「バンケ社」の所有権が、スイスの人形素材を扱うグローレックス社に移行した。バンケの死後、母親のルース・グラウが経営を引き継ぎ、ヨーロッパでもっとも質の高いといわれる展覧会「ドール・アート」を主催してきたが、今回の所有権の移行は、関係者の大きな関心を集めている。

ロエリー・ブロークスマ ミュラー

(ドイツ)

文 ウルスラ・ドリスケル

ロエリー・ブロークスマ・ミュラーは、美術畑出身の人形作家の一人である。彼女はオランダで美術と哲学を学び、現在は、結婚しドイツに住んでいる。夫のゲルド・ミュラーは、プロ並の腕で、彼女の作品を撮影する。

私が彼女にあつたのは、一九九一年、彼女がデュッセルドルフで始めて作品を展示した時だ。そして間もなく彼女は成功を収める。作品は、その美しさと完璧さから、他のアーティストによって購入されていたほどだ。

彼女はプロの水彩画家でもあり特にドイツの風景を描いた作品は、賞賛を浴びヨーロッパにおける数々の展覧会で受賞した。

毎年五月の末に行われる「ドル・アート」では、彼女の人形は出品されるとすぐに売り切れてしまふ。彼女は、真のアーティストである。そしてその優しい人柄も、彼女の仕事ほどに美しい人である。

*この記事は、ドイツのドル・ジャーナリスト、ウルスラ・ドリスケルから、最近もつとも成功した作家の記事として寄稿されたものです。写真は「アンネ」



ゾフィア・マジック

(オーストラリア)

ポーランドからオーストラリアに十二年前に移住した。この国に「母なるエネルギー」を感じ、「地球の子供たち」をテーマに人形の制作をしている。

ポーランド時代、ゾフィアはオーケストラのバイオリニストやコンピュータのオペレーターなどをしていたが、息抜きのために、自然に親しみ、粘土いじりなどをしていた。

もとより人形への関心や創作意欲はあつたのだが、実際にポーセレンの人形を作りたくて粘土を買ったのは、わずか二年前。作り方は習わなかったが、一年もたたぬうちに最初の一体を制作、アメリカのショーに出品、雑誌にも取り上げられ、彼女にとって、人形制作は新しい仕事となった。

一日に十二時間は制作にあてることが、今もなお、クラシック音楽は、大きな支えとなっている。

心理学も学んだことがあり、将来は音楽、心理学、立体物の制作の知識を、精神的に問題がある人のために、特に麻薬に走る若い人のために、新しい精神療法として役立てたいという。

*この記事は、ゾフィア本人の寄稿です。写真は、左…カタリナ右…ヴェネッサ(アポリジニの子供に発想を得た人形)

近況報告

くら田たまえ



昨年1月、鬼の人形を展示した東京での初個展。

9月には、同じく東京でうさぎの作品展。

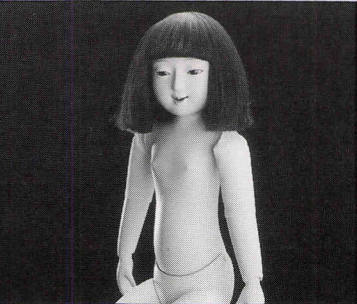
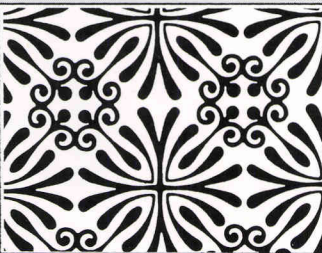
鬼百匹を目標にする他、自分が楽しんで生まれた作品は
他の人も楽しませることができると信じて制作をしている。

今年3月、4月と在住している大阪で作品展がある。(P3参照)

classes

教室案内

*教室案内はD F J偶数号で掲載致します (掲載無料)

			
エコール・ド・シモン 四谷シモン人形学校 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-5-4 ☎03-3402-9488 月、火、水、木、土 1:00-4:00、6:00-9:00 入学金 ¥50000 維持費¥2000 月謝 ¥14000 ~ ¥20000	竹取物語人形学校 〒171 東京都豊島区目白 3-17-27 ☎03-3954-3395 月：創作市松人形 (宮崎優人) 火：創作抱き人形 (竹村和子) 水：着物縫い方 (桑原静江) 木：創作抱き人形 (小林三千子) 入会金 ¥20000 月謝 月¥10750 火¥13000 水¥ 8500 木¥13000	ドールスペース・ピグマリオン 〒158 東京都世田谷区 奥沢6-28-14 林J-201 ☎03-3704-3730 月：福島光太郎 火：渡辺素子 木、金、土、1・3 日曜：吉田良一 月4回 1・8月は月3回 入会金 20000 設備費・毎月1000 月謝 12000	ミワ・ドール・アカデミー 〒157 東京都世田谷区 祖師谷3-12-1 サンモール 成城103 * 本部 世田谷区砧8-26-1 ☎03-3415-3800 土曜日：三輪輝子 入会金 15000 設備費 1800 月謝 16000~ 20000 (チケット制有り)
			
藤井 路以教室 〒173 東京都板橋区 中丸町39-2-104 ☎03-3530-6598 火、金、第4日曜：藤井路以 入：20000、月：12000、雑：500	ARTモマージュ 所由紀子教室 〒206 東京都多摩市 貝取2-5-3-506 ☎0423-76-1294 第1・2・3金曜：所由紀子 月謝：9000	岩切人形工房 〒186 東京都国立市東1-3-15 国立ダイカンプラザ106 ☎0425-71-3221 水、金、土：岩切克樹 入：15000、月：13000	水澄美恵子 人形教室 みなづみ 会場：東京都多摩市落合2-35 バルテノン多摩4F 連絡先：☎0423-38-8639 水澄 第1・3月曜：水澄美恵子 入：10000、月10000 名古屋有り
			
青山カルチャーフォーラム 東京都南青山2-12-11 秋山ビルディングアネックス 第1・2・3水曜日：高橋富子 連絡先：0473-54-3446 高橋 入：5000、月：12000	布と綿で遊ぶ創作布人形 三越文化センター 東京都中央区日本橋室町1-4-1 ☎03-3274-8595 第2水曜：松原登代子 佐々木明子 入：6000、6カ月受講料：27000	創作粘土の会 ラ・バンボーラ 本部：東京都練馬区石神井台 1-12-11 ☎03-3997-8687 講師：高橋節子他 読売文化センター他に教室有り 入：15000、月：12000	ドール・サロン麻生 〒194 東京都町田市玉川学園 2-11-7 ☎0427-20-1423 講師：麻生やや 日時はお問い合わせを 入：10000、月3000~6000

DFJ 活動報告 出口

磯貝ミニチュアハウスギャラリー見学会

去る十二月十一日、作家の岩切克樹さんはじめ、総勢九名が護国寺駅に集合。直前になって、近所にアンティーク・オルゴールの博物館もあることを知り、見学を追加した。

「オルゴールの小さな博物館」では部屋ごとに、時代・種類に分けた見事なコレクションが並び、順番に説明を受けながら演奏を聴くことができ、一同、夢のような音色や、往日のオルゴール職人の工夫や技術にため息が絶えなかった。

その後、磯貝吉徳氏のミニチュアハウス・ギャラリーへ。ミニチュアの歴史の概略を講義して頂き、見事に凝縮された氏のロマンの世界を堪能。技術的な質問も出始めると、磯貝氏はプライベートの仕事場で、使用機械の説明から事細やかに丁寧に説明して下さり、一同大感激。

充実した時間の後は、忘年会場である新宿のトルコ料理のレストランに移動、今回は姓名判断の話で盛り上がり一九九四年は暮れていった。

3枚のディスクが重なって「合奏」するアンティーク・オルゴール



幼少時代を過ごした家を再現したミニチュアハウスを説明する磯貝氏



「オルゴールの小さな博物館」
一七八十年代から現在までの自動演奏装置を二百数台所蔵。月毎に展示が変わる
*訪問前に、必ず確認の電話を！
東京都文京区目白台三二五一一四
☎ 〇三三九四一〇〇〇八

磯貝ミニチュアハウスギャラリーに参観をご希望の方は、DFJ事務局までご連絡下さい。

編集後記

ドル・フォーラム・ジャパン事務局長 小川千恵子

☆ 阪神大震災の悲惨なニュースは、世界を駆けめぐり、その惨状に、皆、何かしなければ、という気持ちに駆り立てられた。私の元にも、GDS会長のキャロル・スタントンやアメリカの知人から現地の人を気づかうファックスが寄せられ、大変ありがたい思いがした。被災地の地区には、わがDFJ会員もあり、安否が気づかわれる。ぜひ無事とのお便りが聞けることを、心より祈っている。

☆ 今回の表紙の、吉田良一氏はインタビューで多くのことを語ってくださった。問題提起や、示唆にとんだ内容など、できるだけそのまま会員の方に伝え、一緒に考えて頂きたいと思い、カバーインタビューは増ページとなった。会員の方は、このインタビューをお読みになって、どのようなことを考えられたらうか。

☆ 「ゲイルからの手紙」の原稿には、ゲイルのユーモアや人柄が感じられ、味わい深いものだが、残念なことに、スペースの都合上、カットしなければならないのが彼女のモノログ的な部分が多く、訳文が平面的になってしまったことをお詫びしたい。アメリカのアーティスト・ドルは幅の広い世界だが、CFMギャラリーは志向がかなりはっきりしている。好き嫌いとはなく、ゲイルは「私もWhere誌のワイス記者程度にはカワイイつもりよ。私だって、どんなにか今回のタイトルを『ゲイズ アンド ヒズ(his) ドールズ』としたかったことか！このことは特記しておいてね」というので、ここで追記しておく。ご存知のように、このタイトルはブロードウェイのミュージカルをもじったものだ。すなわち、ガイ＝ズカーマン氏のことで彼女の茶目っ気を感じる。

☆ 前回募集したDFJ補助スタッフとして、今回から植木樹里さんが制作に加わった。劇場美術を志す美大生。心強い若い味方を得て、益々誌面充実を図りたい。

継続手続きはお早めに！

今号で会員期限の切れる方には郵便振替用紙を同封しています。継続会員の年会費は、4500円となります。(翌号発行までにお申し込みのない場合は、無効となりますのでご注意ください。)

投稿募集

- 【LETTERS】感想、ご意見、ご希望など
【CS(新人紹介)】自薦、他薦を問いません。まず、写真をお送り下さい。
【REVIEW】個展、展覧会の感想。400字程度
*以上の採用分には、リーセ葉書セットを進呈。
【INFORMATION】ニュースがあったら何でも
【近況報告】プロの作家の方の最新作の発表の場です。
応募はCSに準じます。(採用分には規定稿料をお支払いします)
【教室、個展他の案内】随時受けつけます。
*応募は、項目を明記の上、DFJ事務局まで

DFJ購読方法

ドル・フォーラム・ジャパン(DFJ)は書店では販売されていません。購読は、会員購読制です。DFJは年に4回5月、8月、11月、2月に発行されます。
お申込は、年会費5千円を下記の方法でご送金下さい。
*郵便振替 00120-8-717693
「ユーラシア・ドールズ」
(通信欄に、「DFJ」と明記する)
*現金書留 または 郵便小為替

バックナンバー

1号(表紙:大島和代) 2号(山口景子) 3号(岩切映幹子)
会員の方は1部1000円です。非会員の方:1400円

ドル・フォーラム・ジャパン第4号
1995年2月22日発行
編集発行:ドル・フォーラム・ジャパン事務局
〒189 東京都東村山市久米川町3-27-57
☎ 0423-95-7547 FAX 0423-95-7975

編集責任者:小川千恵子
印刷:株式会社 日出島
ドル・フォーラム・ジャパンは ユラシア・ドールズのスポンサーシップにより運営されています。

次号は5月19日発行予定 DM同封希望の方(会員のみなさん)は5月15日必着

*本誌掲載の記事・写真の無断転載・複写を禁じます。

DOLL FORUM JAPAN 3-27-57 Kumegawa, Higashimurayama-shi, Tokyo 189 JAPAN tel 81-423-95-7547 fax 81-423-95-7975

永野 智

本誌レビュー欄でも紹介した永野智の伸びやかな発想と、卓越した技術によるユニークな和紙人形。浮世絵を立体化する造形力は、必見。顔、手足は白磁。越前和紙の鳥の子にこだわり、独特の淡い色調は作品に気品を与えている。色褪せる和紙人形の欠点を逆に、色褪せるほど味が出るようにと考え、制作されている。

DFJ会員限定特別価格

¥138,000- (送料込み)

3月1日 ~ 5月1日 のみの期間限定品



DFJ 3号で紹介された
ヒルデガルド・グンツェル写真集
「ドール・ファンタジーズ」

¥3500-